

骨董集

上海

下卷  
前





Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. It consists of about 10 lines of text.

骨董上編 下前首之一

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. It consists of about 10 lines of text.



骨董集上編後帙二卷目錄

下之卷本

- 毬杖一
- 粥木粥杖祝木ちいたけ棒四
- ひくろの名義ひくろの假名六
- 離社離合八
- 古書どもにんそく離遊くまぐ十
- ひくろ衣十三
- 室町家の比れ離圖十五
- 三月三日乃離遊十七
- 土離圖二十
- 後の離二十三
- ゆりく付礪毒二
- 羽子板三
- ね乳母日傘と云諺五
- 離遊の始七
- ひくろれ調度十一
- 又十四
- 伊勢小米離十六
- 離繪櫃十九
- 離椀折敷圖二十二
- ひくろ草二十五
- 古製離圖十三
- 唐土鏝人十八
- 離使圖二十一
- 姫氏離二十四
- 又十四
- 伊勢小米離十六
- 離繪櫃十九
- 離椀折敷圖二十二
- ひくろ草二十五

下之卷末

- 勸進比丘尼繪解一
- 人形圖并考三
- 於国哥舞妓古圖考五
- 酸醬を吹かす七
- 比比丘女九
- 目あざ軒のどめ十二
- 宿世焼十四
- 輪鼓十七
- 海老上臈十九
- わかく豆腐田樂豆腐上物二十一
- 板風呂湯錢風呂屋二十三
- 端午茅卷馬二
- 後妻打古圖考四
- 小兒を愛ふバアとの八
- 編笠古圖十
- 見世棚十五
- 子日れ離遊贖物の比比奈十八
- 腰鼓兄弟二十
- 端午頭巾袈裟小
- 糸縷とくろくまがら六
- かくれあそび十一
- 目比十三
- 虫のたこ繪十六
- 比比奈十八
- 提燈再考二十四
- 菅蒲曾再考二十二

骨董上編 下前首之三

- 行燈再考 二十五
- 古画行燈挑燈圖 二十七
- 胡鬼板胡鬼子毬杖再考 二十八
- 手鞠 二十九
- 信濃羽子板圖 三十一
- 追加 姫瓜節供 髮葛子節供 三十四
- 天和貞享の比の雛人形圖 付 ちりつけ 海田 三十
- 虫のたれ繪の追考 三十二
- 打出小槌追考 三十三

よべて五十九條

○上編前後二帙の引書、おとそ二百五十餘種あり、書目とあつてふりまわらん。  
 ○引書の巻のついでをみるに、はしむるに似たりとも、孫引せざる證、凡、孫引ハこれに  
 はしむる、あつて、はしむる、ゆまた、うら、あつて、これ、あり、巻のついで、はしむる、一冊の物、  
 字書のたぐひ、伊呂波りけ、せ、の、たぐひ、あり、写本の巻のついで、の、あつて、はしむる、  
 あつて、おの、が、一、本の巻のついで、はしむる、あつて、

○雛の假字の事

契沖雜記 小ひひひと聞ゆるこゑ、たゞ鳴り、といひ、**古言様** も此説、  
 れ、や、もの、ひひと、音、りて、名、だ、る、あ、つ、て、  
**宇津保物語** 巻、小、葉、を、い、で、孫、づ、う、も、あ、つ、て、  
 ひ、と、あ、つ、て、と、あ、つ、て、ひ、と、も、ひ、と、も、あ、つ、て、  
 ころ、あ、つ、て、**玉かつま** 十、卷、の、説、ハ、これ、ら、た、ぐ、り、  
 ハ、ひ、の、を、ひ、ま、そ、い、あ、つ、て、か、あ、ひ、の、あ、つ、て、  
 と、い、り、あ、つ、て、此、説、ハ、さ、う、て、あ、つ、て、  
**本紀** 十、卷、二、比、賣、那、素、寐、の、釋、小、引、私、記、の、こ、と、  
**江家次第** 七、卷、立、太、子、の、條、も、比、比、奈、と、か、け、る、  
 か、く、も、こ、の、き、も、あ、つ、て、  
 ひ、ち、本、あり、ひ、ち、とい、つ、六、畧、言、め、て、未、あ、つ、て、  
 鳥、の、子、を、ひ、か、ひ、か、鳥、



事物紀原 三卷 宋朝會要を引く云「毬杖非古蓋唐世尚之以資

玩樂」あまの唐の時盛ん。聖武天皇の御時ハ唐の玄宗の時ハ

のこれハ打毬のおとまりれ。和漢同時とりべ。○唐の僖宗殊よことを

好めり。僖宗帝ハ。御國の貞觀仁和の比ハあれ。○遼小それを善擊者

ありけり。遼史 卷百 茲臣傳下「耶律塔不也。以善擊手鞫幸

於上凡馳騁鞫不離杖」とええたり。淵鑑類函 卷三百 巧藝部ハ

打毬の古事あらび。詩篇歌をのめ。裁たれどそのさわりづらゆれ。

ら小拳ど。○さく打毬より変り別れて。毬杖と稱。一種の玩具よあり。

づれの比より詳あらむ。其まじ。宇都保物語 小ええたり。中比の物

ええ。源平盛衰記 卷二 云「法師の首を造。毬打の玉を打が如く。杖を以て

あち打ら。打蹴たり踏たり。様々あり。大衆兒共態と此玉あり。物と向ハ

骨董上編 下之前一

隱岐國一流されける時。後鳥羽院を毬打の冠者らそ母とあつた。その

なることをとる所。此君あまりに毬打の玉をあせさせ給ふ。文覚をう小あけ口

中けるあり」とあり。義經記 卷二 牛若まがひまうでの段云「あたらより。まら

ら母の玉のやうぬめをとら出。木のえびにけ。ひとらまがけり。がび

と名付。一ツを清盛がびとをわけられける云。袖中抄 叙顯昭撰 たまの

ちの條よ云「十節録 黃帝云取蚩尤頭。毬之取眼射之。

云。毬杖是也。云。以彼例漢土年始用。件事國中無凶

事。仍日本一國學其例。年始打毬杖云。日本職時記。此のたから。附會の

徒然草 下之卷 四十四段 「さざらやうの正月小打たるまがらやうをせ云院より

神泉苑へ出て焼あがるあり云。托學往來 玄惠法 改年初月托宴。

毬打云。袖中抄の作者顯昭。後鳥羽院の府時の人。當時









中より。さそ蚊をかきれしめんたれ。さそ蚊のことしほきけり。あり。林逸節用

集 明志「羽子板・胡鬼板」コキとあり。日次紀事延宝四年正月の條云

羽子板イタ・胡鬼板コキ・子コキとあり。日次紀事延宝四年正月の條云

羽子板イタ・胡鬼板コキ・子コキとあり。日次紀事延宝四年正月の條云

羽子板イタ・胡鬼板コキ・子コキとあり。日次紀事延宝四年正月の條云

羽子板イタ・胡鬼板コキ・子コキとあり。日次紀事延宝四年正月の條云

羽子板イタ・胡鬼板コキ・子コキとあり。日次紀事延宝四年正月の條云

羽子板イタ・胡鬼板コキ・子コキとあり。日次紀事延宝四年正月の條云

羽子板イタ・胡鬼板コキ・子コキとあり。日次紀事延宝四年正月の條云

羽子板イタ・胡鬼板コキ・子コキとあり。日次紀事延宝四年正月の條云

羽子板イタ・胡鬼板コキ・子コキとあり。日次紀事延宝四年正月の條云

骨董上編 下之前六

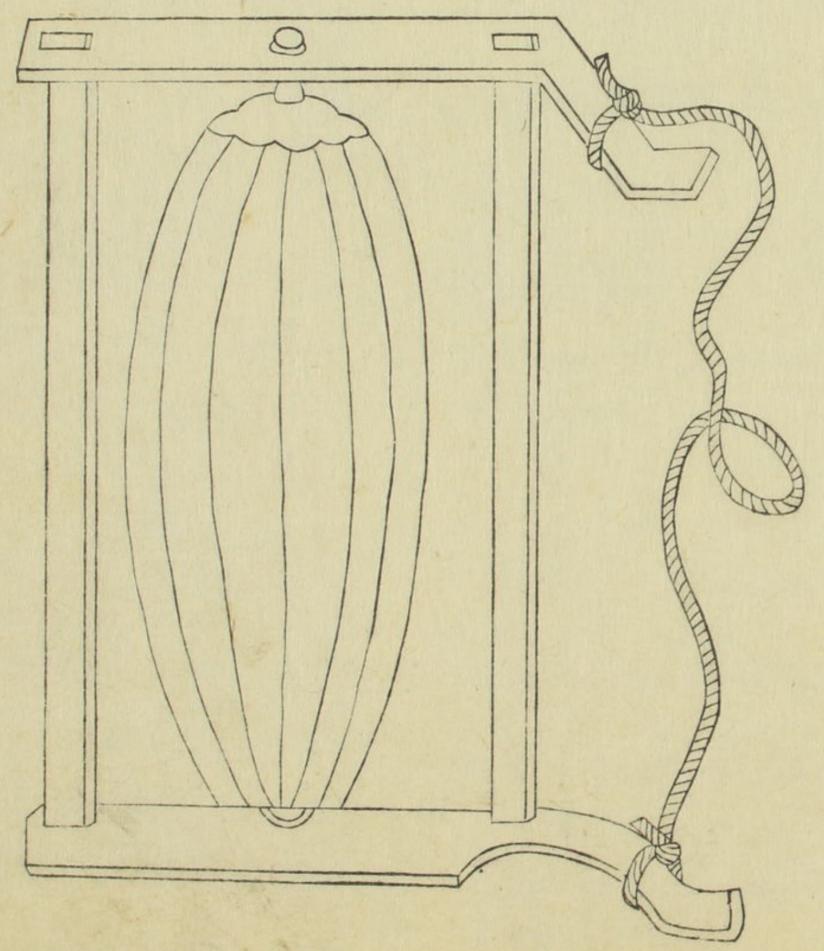
滑の板 トみんあかへしのどとをわらわらとまの月のこまひのそらたをわ  
増山井 實文三さだらちうらなと云名らんえたり。その義ハ 味見考

○礮毒圖

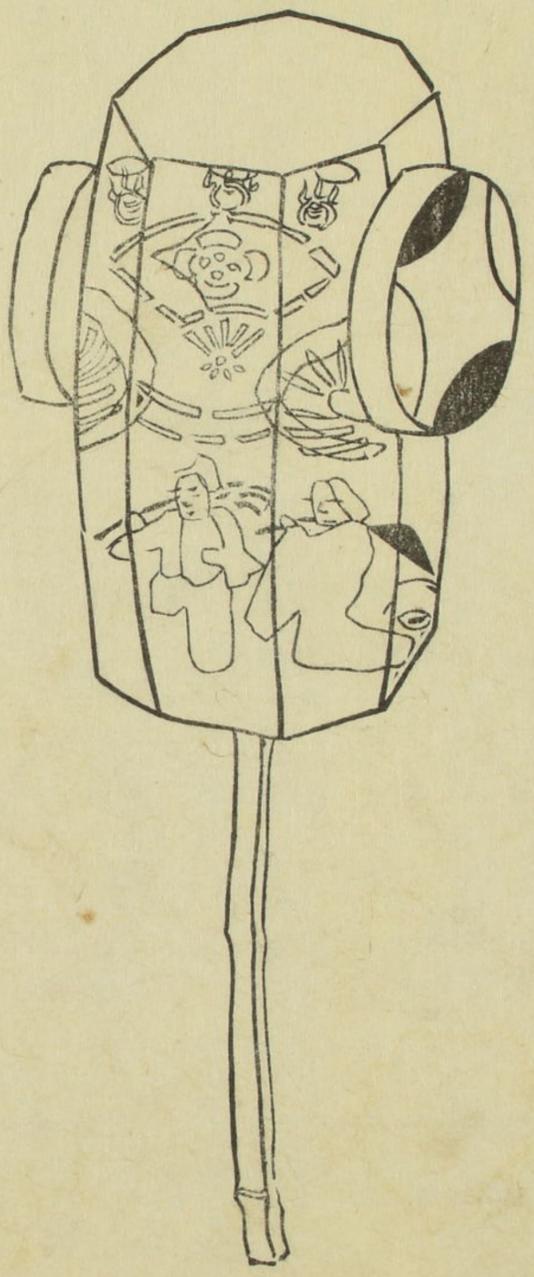
明王坊

三才會  
器用十一の巻  
は此會を裁  
たり

和漢三才會  
の礮毒の圖を  
りては八十八  
夷果五飲子の  
各一録録田器  
也本朝田家  
味見考とあり



○おぼろぎの音



これ今京師よく巧造の物あり。本を八角より作り、ありくに耐と焼くらし鶴と松を丹青よく画けり。おぼろぎの本地の挽物、柄の竹をとり、おぼろぎの柄、大小いろいろと、精鹿もあらん。

油尺より作り、おぼろぎの長さ五寸余、柄の長さ四寸許り。

上巻 下巻

○おぼろぎをかく括ぶ古音を、おぼろぎをかく括ぶ古音を、ついでに、おぼろぎの音あり

貞享五年印行

日本歳時記



明暦四年印行  
京童



明暦の比印行  
一休



玉い  
くろくろ  
とらちこまたりらり

万治三年印行

世説問答

此音を以て、杖とぶらりと別

を後同答の天文の古書、あれども此は、上木の時

當時の

さゆを

りれは万治

の比の證と



くろくろ



たのむ

○羽子板古制

これ奥列三春のうらり傳へたる古制あり  
 制作質素よりかかしのびら古雅あり裏の立波に  
 鶴をのりよも祖造りよるがたに  
 本地の胡粉をぬり墨丹緑青をよるうらりどれど



骨董上編 下之前八

○粥の木 粥杖 祝木 布いだけ棒

正月十五日 粥を焼たる木を削りて杖とす。子りぬ女の後を打ハ男子を産と  
 する。これいと古に俗あり。卯杖と別と云ひ。枕草紙 卷「十五日ハ卯杖のせく  
 まる。卯の木の木ひきおくと家のこたら女房あごうおふをうそれとよしうい  
 るとつよしうしを心づひあるけしきもあうしきとてけるものあらん  
 うらめたるいしきとつよしうけうのこららひたものしきとてけるものあらん  
 こつり也云々」  
 狭夜 四の巻 正月二十三日 卯杖と別と云ひ  
 女房クシ  
 又うしきとよしうしとらるはゆひあもてとてけるものあらうしうらるるを大  
 後いん給ひてまろをわつまろとてけるものあらうしうらるるを大後  
 むあつらうしきとよしうしとらるはゆひあもてとてけるものあらうしうらるるを大後  
 舟内侍日記 上の 卷 正月十日又日まろまろとてけるものあらうしうらるるを大後



九巴上者各取柳枝去皮彫成木刀杖を木刀と云う以皮復此説右の日記紀事  
外纏于刀上用火烧去皮以分黑白之花此説右の日記紀事  
名曰荷花蘭密子孫の再取荆棘之條挿供香火神前  
次集各童手執木刀隊闘于途凡有婚久無子之婦  
將木刀遍一身打之口念荷花蘭密必使此婦當年有  
孕生男云々と云んばたゞこれ明人此方の事を傳へてきたる旨あり○ついでいふらん  
人養草貞享三年 著卷之一粥杖の半をたると云々今も北國の方より杖の本として  
雷盈槌のごとくある丸木に鶴亀松竹宝づうの繪を彩色幼男ども  
いさぐ産せぬ新婦を打祝ひあり書言字考粥杖北越人  
謂之杖木年中風俗考貞享四年印 正月十五日の所云々たのこの年  
大の子と云義也陰相を作りて童のりてのそびとて女を祝して大の  
そのこ子を持たまると云義也年中故事要言貞享三年 印本卷二 云々美濃國泳官の

骨董上編下之前十

村の正月十五日は新杖を削て其削屑の縷の如くあるを杖の頭残  
て名て削掛といふ是れ女を替て大の男十三人といひ然れども其義を知る  
者あり是も男子を生くるを求る祝とありん○さして下  
畜を生む北越も祝木とありけり傳へて今も造る杖あり勝軍  
木又勝の末或の胡桃木も造り春初男兒ある方かろつらつと餅花とてもよ  
一所掛垂正月よりして男児らしをたづまて新婦ある事あり又  
新婦の腰を打まひびをて子を孕まはるひと又祝とと彼地の方言  
小正月十四十五十六日をさして小正月といふ不ようして祝棒とも削掛とも  
いふとぞられ全く古代のゆ杖の遺俗あり日次紀事婦人養草よりい  
とるは是あり勝軍本と云い白膠木のこことぞ

和訓栞 由色げ名の条云々の諸國も新婦を遠く正月よりとるたきと  
秘今りせの神宮のりりりあり云々



のららひたり。され進んせまぐものりしが。今のなえて傍よのさのどし。

○か乳母日傘と  
いふ諺のゆゑ

これの今やあつて百七十八年たつ

前賢永のころの俗  
昔の民の女の質素の  
風。今の田舎の女よ。  
かろくらのたれを  
け古画と  
するべし。



承応明暦の比まづ  
女の髪。のびくひんた。  
のま。だもひんゆひんた。

骨董上編 下之前七

○ひらの名義ひらの假字 六

和名鈔

離

和名比奈

契沖雜記

離

ヒナ

ひらひくと聞ゆるまづの鳴

鳥

醒まれば

鳥の子の

ひらの名の  
義きとつり

玉のりま

十人の形をらひさく作りて

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらの名の  
義きとつり

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらの名の  
義きとつり

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらの名の  
義きとつり

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらの名の  
義きとつり

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

ひらののりま

○離遊のりま 七

書紀

五卷

宗神天皇十年九月、童謡に比賣那素寐殊望

比賣

那素

寐殊

望

古事記

此句あり

之

遊

今案

比

比

奈遊

也

とあるを

これをひら

をひら

をひら

をひら

をひら

をひら

をひら

をひら

をひら

をひら

遊

今案

比

比

奈遊

也

とあるを

これをひら

をひら

をひら

をひら

をひら

をひら

をひら

をひら

をひら

をひら

日本靈  
異記  
上卷二  
離ラ  
トナ  
可考







元服の故撰政教実公の姫君九才よりありあがり女侍よまゝありあがり  
きつたの事をしてゐる事よ「女侍もまゝであつたらひさうかたすればむいあそびの  
中うもどええさそせ給ひける。云々」  
源氏を物まじり比より仁治の年まゝとせむれど二百三  
四十年より後とされど當時のひまきびのあつたふゆめとちりる。  
それらの文どもをかひひさうとてふゆめひのひまきびのあつたふゆめとちりる。

○離の調度 十一

紫式部日記 上 上東門院 皇子を産めひ一事を記する条よ「ワ宮の侍

まうあひひ。納言の君ひんがにまわりまゝらひさたれだの侍らども。侍ら  
のだの侍らども。ひまきびのぐとさへ也」  
の侍らにええとてさるるれひまきびの具よひひの  
膳梳 鶴臺 中うのあつたふゆめとちりる。  
枕草紙 侍らよ。あつたふゆめとちりるの  
調度 侍らよ。あつたふゆめとちりるの  
調度 侍らよ。あつたふゆめとちりるの

濱松中納言物語 二の巻よ「ほごりりあつたに姫君よまゝありあがり  
よまゝにうつらまゝありあがり。云々ひんがに姫君の流方よとて文らひさたれ調度

骨董上編 下之前十六

どもよひまきびのやうにまゝらひひて。云々」  
これらうらわよつきたら古巻よひひの  
古巻よひひのやうにまゝらひひて。云々  
調度よひひのやうにまゝらひひて。云々  
造りよひひのやうにまゝらひひて。云々  
質素

○ひさか夜 十二

あけらの日記 下の巻よ「げあつたに姫君よまゝありあがり。云々」  
天延二年五月四日

まうどら。まゝらひひて。云々  
たてまゝらひひて。云々  
さかかたりのひまきび。云々  
ひまきびのやうにまゝらひひて。云々  
まゝらひひて。云々

あつたに姫君よまゝありあがり。云々  
あつたに姫君よまゝありあがり。云々  
あつたに姫君よまゝありあがり。云々

又

かつら夜たつやとぞうららちやあめをひとよたのむとあまぶ  
神備  
 按るよあしとまれんげ日記の作者東三條摂政兼家公の室道綱マ  
 の母あり公の寵おとろへたるをあげきて是等の哥ありとよひの衣と  
 ども今雛形とりあがとらひさき衣服あるべしそれを二つ縫て中前よ  
 右の哥を一首づつめ死つて女神よ進たるあり今世の女の童栗清の衣神  
 を女神ありとて紙雛ひの形袖形又ハ浮を袋うと猿あど縫て進るハ  
 られらの遺意やあつらんごよりにそつづのまの葉よんちき半ぞあわ  
 かる○栗嶋の衣神少彦名命ハ高皇産靈尊の指間より漏墜あひ  
 ねどのらひさき衣わらうれが雛をたてまつるもふしあまのあつ  
 ざうららと

骨董上編 下之前十七

○古製雛圖 十三

此圖かのが得たる模本と  
 真物とたがよとらあつと  
 ある人とりゆえふしあまの  
 他日真物とよとらあつと

源氏物語 若紫の巻よ  
 源氏の物語に  
 されば羊のひさきとあつと

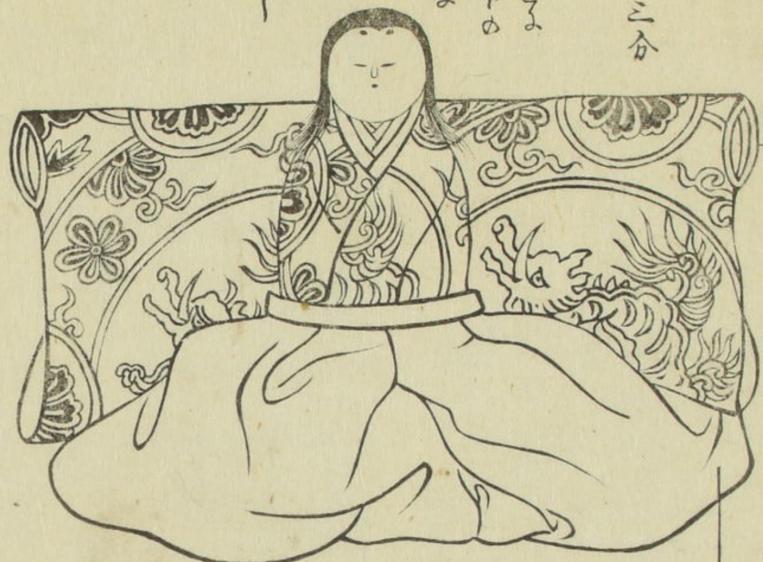


○同女雛音

高サ  
三寸二分

○今の世は  
一種かやの  
丸きひま

あつ  
此遺  
制

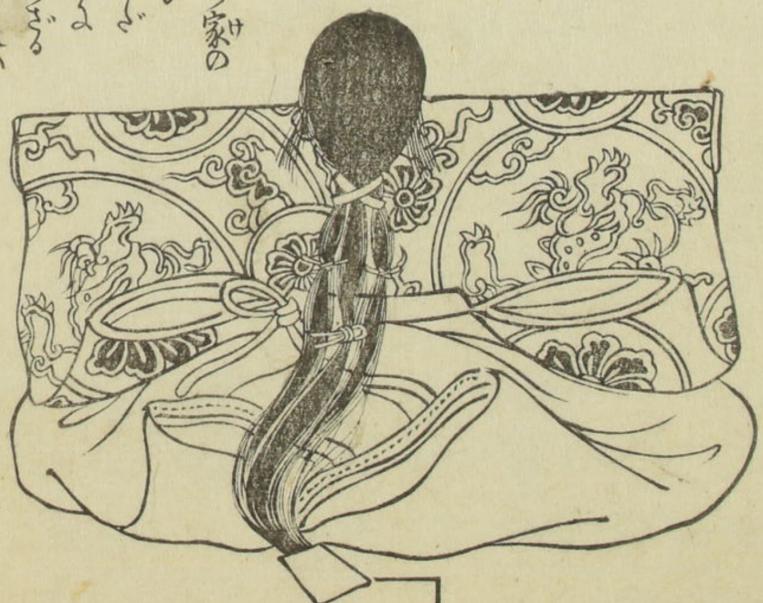


そのころ紅絹

袴紅絹

○同背図

按るよ  
ひろまら家の  
比ひひま  
拵ひま  
三月二日  
さし  
時なればこれい  
上さめのたのり拵ひ  
一たひひあつ



紙留金

骨董上編 下之前九

○伊勢の小米雛

十六

雛托の記

全一冊寛延  
二年印行

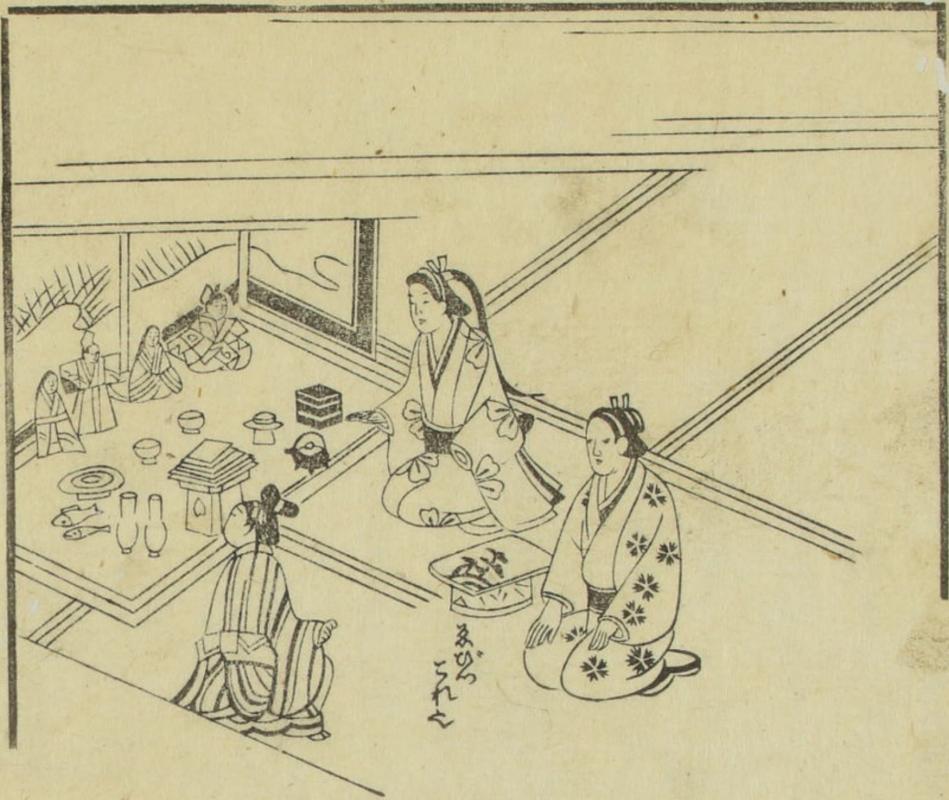
伊勢の祓宮久昔より女子のり拵ひまよ。小米  
ひまよとらひまよと男女乃人形を作り。岐宜と衣股を  
上居居て主婦ひつゆら粧ひをやり拵とす。伊勢山田の  
おのれけ中を伊勢山田の某氏よりひまよ。伊勢山田の  
て女児平日の雛拵ひよ。小米雛とて。又六分許の紙ひま  
まろりのをまき。とひ中一寸許長と二寸許のらひまよの  
丹青めて文様をのりたり。或は行成紙をまき。裁て用ひ  
さき紅絹のきれまを添て。衣領つきをまき。裁て用ひ  
巾ひろき一ひらの紙よ。坐敷客間居間臺所など家のう  
主婦。或は婢女奴僕まき。拵ひまよ。拵ひまよ。拵ひま  
本家平日のさめむらまき。体まき。拵ひまよ。拵ひまよ。



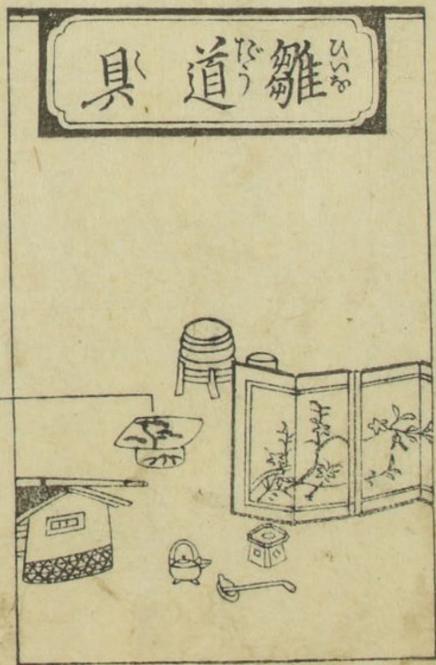




貞享五年 日本歳時記に載る雛遊の畵



○元禄元年印本 女用訓蒙畵景に載る法櫃の畵



當時のひまはびりあいのごころ  
段をまうけどたゞ坐上よ  
爰物一ととあはくのみあひさら  
よてもひりの質素をあらわす

骨董上編 下之前三

○元禄十年印本 鳥居清信がゆける後のうちいふ畵あり



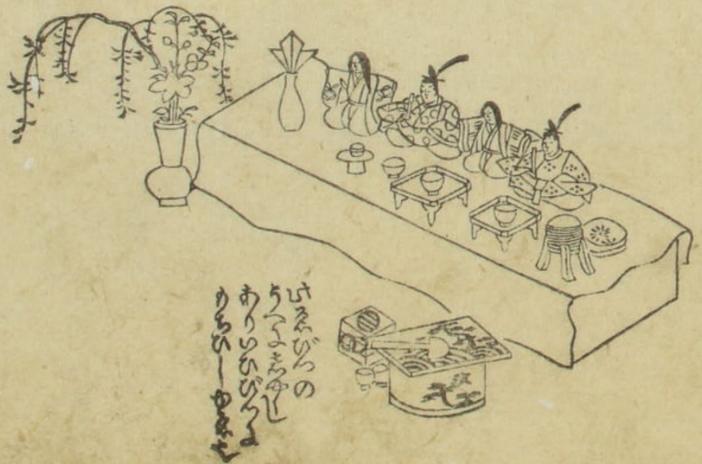
○寛延二年印本 雛社の記に載る法櫃の畵



ひまはびりあいのごころ  
雛の  
法櫃の  
畵あり

○享保十七年印本

女中風俗玉鏡に載る畵之當時の  
かのごとくごころ  
一段をまうけしり



ひまはびりあいのごころ  
雛の  
法櫃の  
畵あり

按るよあいのごころ  
這子紙ひのまらぬ  
あはびりあいのごころ  
立雛ひのまらぬ  
今ゆひのまらぬ  
まらぬをあらわす  
りどそれとら別あるべし

諸国奇遊談

寛政十一年刻 二 絺櫃のりをとりておよ

「今も洛北の村里より三月の節句まで」

必用ふ予が幼時 宝曆のまじり於て

用ひし由も二月の末に賣りきりて

うらふ今いたえてえぬらど今畜

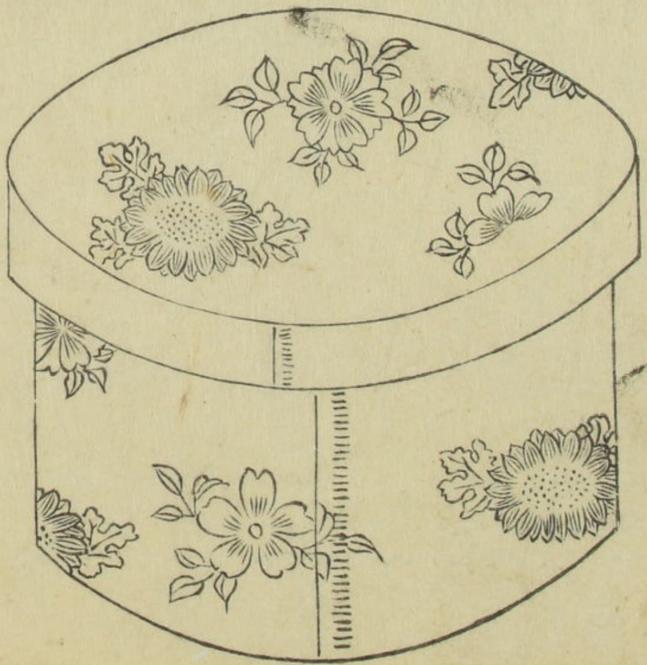
とる遠岡又洛北の今の形を

とふまるとしひて此畜を出せり

○醒 按るよ此絺びりよ櫻と菊を

やりのい三月のひると九月の後のひると

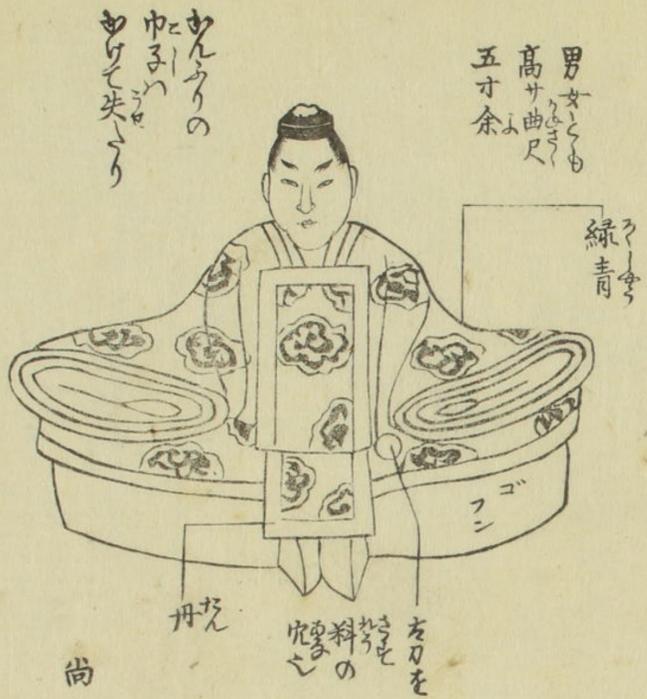
うたの絺あるべしこれ近世の制されり



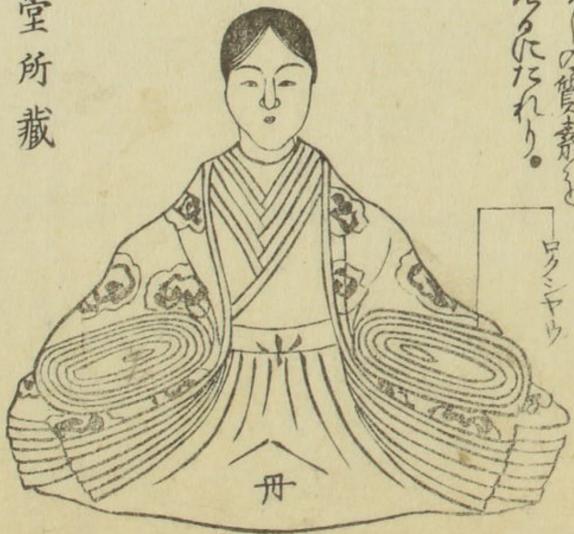
胃董上編下之前三番

○享保の比の土雛畜

二十



尚志堂所藏



とて土をりてほくを焼て胡粉丹緑青  
あどとていろどりあつたのぐりしち色あり  
かうそ享保前後の物とせん色  
深草かきよりやあらん  
ひりの質素と  
えられたれり

今も你草  
よて土の  
内裏ひ子を  
つる田舎  
まのそれを  
りら  
とぞ

今も田舎より女子生れくらくめく三月の節句よ江戸の今戸焼の土ひるまをかくりて  
祝ふうとにりに古俗の田舎よのこれり。奥列の田舎も土ひるまをりらふとらん。  
土佐ニ毛羽はエフヤリ、三十三ヶ年アトにてハ上下土ヒナヲ伏見デエトテ立タリ、

男女とも  
高サ曲尺  
五寸余  
緑青

中ふりの  
あつたりの  
あつたりの

○ 雛使 畜 三十一

ひまのつひのぎ  
 雛使 畜 三十一  
 三月三日 爲節物供雛  
 本朝食盤 白濁云々  
 俗三月三日 爲節物供雛  
 茶 此のれいそのむも白酒をも用ひたり  
 元禄十六年印行  
 俳諧 日本国  
 雛のつひの酒の弱足 布名  
 ちや 興海きまの上のありがさ  
 竹白 雛のつひの酒の弱足 布名  
 ちや 興海きまの上のありがさ  
 竹白 雛のつひの酒の弱足 布名

○ 天和貞享の比叟川師宣がかける  
 年中行事の印本に此禽あり

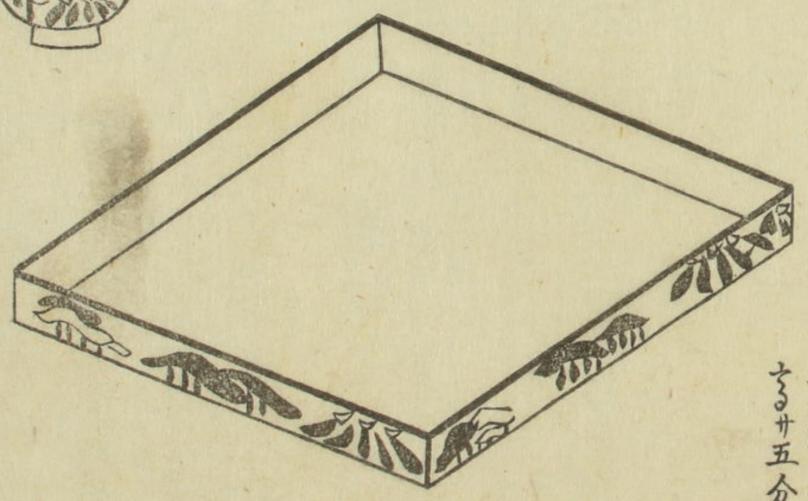


骨董上編 下之前二十五

○ 雛 椀折敷 圖 三十二

ひまのつひのぎ  
 雛 椀折敷 圖 三十二  
 椀の挽物の本地あり折敷は片木の  
 まつりゆきりゆきのまそ粗糲よほくま  
 られも本地あり丹緑青よほく松竹の  
 弦あり京師の明和安永の比  
 まんありしる。弦ひつと  
 ちや。古れ物もをあらぬ  
 まつそ  
 質素まそよりく雅致あり

椀 三寸一オ  
 一分余  
 五寸  
 五寸  
 ちや。古れ物もをあらぬ  
 まつそ  
 質素まそよりく雅致あり



折敷方三寸三分  
 寸サ五分

京都青李庵藏

○後の雛 三十三

後の雛の事古き物よいまもえあつてゐる。元禄以後の事あるべし。滑檜雜談  
正徳三 年撰 卷十七よ云「後の雛 九月九日 和国の女兒ひる拵びをあると云ふ古き

物語もも知り上巳の節に授けらるる。三月の部記を今又九月九日よ  
賞する女兒多し。云々俳諧是を名付て後の雛と云。其上巳は對して謂ふに

晋子十七回 享保八 年刻 一糸物のよきと云るき後の雛と云る附合の白ありされ

正徳享保の比にどぞよのし事。今も京大坂あどあつてある。あれど二月の  
如くさるるあつて雛を二ツ三ツ出してあつてゐる。それもあつてあつてあつて

吾山が朱ひつさきよひつその塚もあつてゐる。ええたり。○播列室の辺よ八朔よ  
ひまを立る所ありと或人いふ。其実否のあつて

○姫氏の雛 三十四

姫氏の漢名を金鷲蛋といひ形鷲の卵に似たれあり。元禄のあ後女兒

骨董上編 下之前二十六

それを雛よはうと平日にゆく拵びたることありき。雍列府志 貞享三刻 卷之六 姫氏九條の

田間より出其大さ如梨。其色至て白。故に姫を以て之を梅と云。女兒斯氏を求め  
少莖を留め白粉を其面よ傳墨を以て髻髪眉目口鼻を畫きて水引を以

て其莖を結び提擧て玩具と云。和漢三才會 卷百 按よ姫氏云小兒之  
を取て眼鼻口の狀を畫き以て翫と云。故小俗姫氏と云。以上二會とも漢文

五元集拾遺 一干氏やわらういへも黒き類。あつてゐる干氏の鎮と云。續氏の志と云  
ありしをわら其角が例のうらつまあるべし。○さくられいんと古に事あり。枕ノ草紙よ「

うたりののありにめきたららごのりね」と云え抄よ「姫氏のふあるべし」とある  
よ古に知べし。清少納言此草紙よ長徳長保の比のふをわけりとなれば今

文化十年より凡八百余年の前の事なり。それか進たせまも抄するに  
ゆづりし。和泉式部集 異本 「わらわらうらわらめりといふとあつてあつてあつて

凡へのうやのうにありたるよきつて「わら我を意しあつてあつてあつて

こゝろのくせもたがひだ  
これの所は人の教りきたるものなり  
あつた人の教り似たるものなり  
因りて

ひいな草

三十五

今のせの女童ひいな草を採り雛の髪をゆひ紙の衣服をさすものごとく  
平日の玩具とてこれをもとをたぬあり  
丹後守の忠義に家百首  
契久慈 源仲正のり

摘  
今俗言ノメルト云ニ通ハス  
二三十年前ノ頃のひいな草  
別つて賣ひまはるるは前より  
今も田舎の童に賣出よありて生て食料もあつたり物ごとく採りて遊ぶものなり

○筆のついでとて貞享三年著「婦人養草」一巻「船のり」の雛一對をとりて海上をのりて風浪のうれひこのころとてひいな草のありて未考  
貞享四年刻「年中風俗考」案するひいな草の井をちりやねあき柱立るるも互用ひて祝ひるものなれば云  
享保十四年印行「女用花鳥文章」ひいな草の井の内は入く清水をもちのりて遊ぶものなり

骨董集上編下之卷前終

骨董上編下之前二十七



